

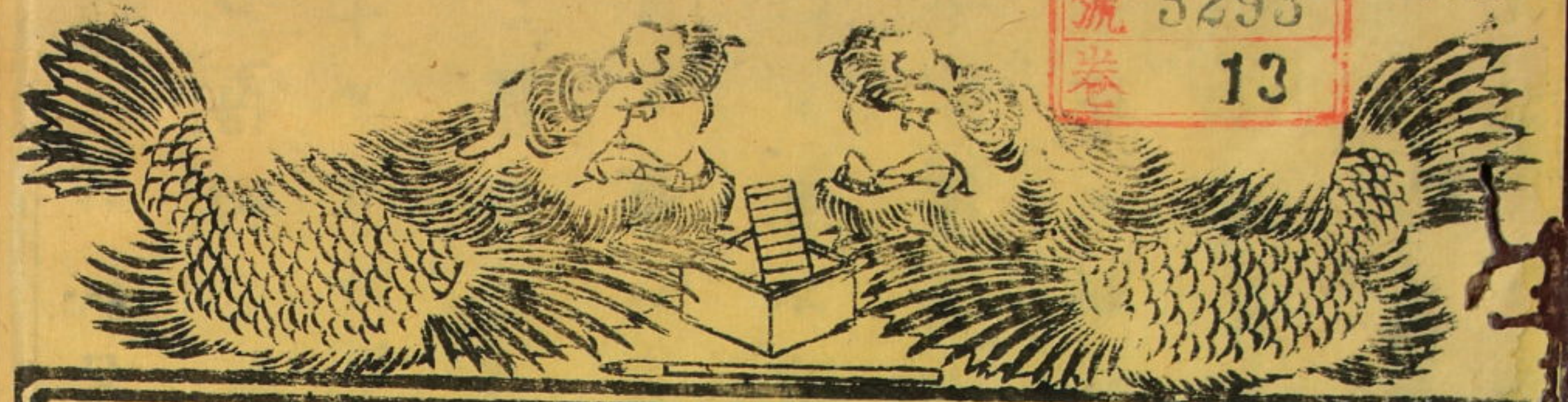
小栗外傳三編

壹

13
3293
13



門 八 13
號 3293
卷 13



小乘外傳

絳山翁戲編

北河辰政画

二十八年九月廿九日
贈
本大學出版部

善戲謔兮不
為虐兮

絳山先生。編述寒燈夜話。十五卷。書肆分為
三帙。至此編。乞序辭於我。我熟思先生之戲
編。主勸懲。故以淇奧詩言。換序辭而已。

文和甲戌孟春

米花散人麓堂題





白糸姫



結城持朝

老攪

常阿上人

横山安秀



一色詮秀

賊婦



書肆裏是箇草廬より来。曰峰山先生所著の寒燈夜話初編二編の既
後兄一々世小行と。弟三編刻既成ぬ。二編中。長兄初編に要を摘て出
讀者の助ふるに。今此三編と。二編に要と。抜抄し。多し。其常道理の
再び松筆を走りすと左れ如し。

照天姫瀬戸橋より身を投り。折る。人買小四郎が舟小こ入り。水せざれど。
既又氣絶る。ぬ。小四郎も是名武の臣なるが。姫を死。知る。保して。蘇生は
其身の上を。同。姫へ。膝浪が毒悪。懲る。実事を述べ。其時。小夜も
いふ人。買来。姫。買。去ぬ。其跡。小女。来。姫。乃。去。向。小四郎。又。同。此。時。小四郎。
姫へ。ま。君。る。と。知。先。水。と。悔。小。夜。身。價。と。小。女。ま。ま。く。自。殺。せ。り。小。女。
兄。の。遺。念。と。は。き。身。價。の。金。を。首。か。け。六。部。と。り。て。姫。へ。去。向。尋。る。と。照。天。小。
美濃國青墓の宿方長が。り。人。賣。度。女。と。り。ま。か。固。絆。く。嬰。女。

と。千。幸。方。苦。と。す。不。必。夫。助。重。方。長。許。来。り。夜。賊。の。為。其。身。棄。つ。と。い。う。
途。ふ。美。登。小。太。郎。救。り。三。州。二。村。山。に。忍。び。き。り。小。栗。助。重。前。小。二。村。山。に。忍。び。き。り。
美。濃。に。金。生。山。虚。空。藏。より。折。り。方。長。が。女。見。花。見。悪。漢。ふ。せ。と。り。後。難。美。乃。及。ぶ。
を。救。ひ。り。花。見。懸。恋。せ。二。村。山。小。還。る。と。死。海。を。方。長。が。り。居。り。也。と。方。長。照。天。姫。二。
村。山。に。居。る。を。知。其。家。長。万。平。と。り。其。當。時。美。登。小。女。と。り。あ。い。て。兄。の。送。金。と。
り。姫。乃。身。と。贖。ひ。度。其。后。照。天。小。女。小。太。郎。の。三。人。美。濃。に。忍。び。が。小。栗。と。知。て。後。姫。
許。小。来。る。花。見。其。跡。を。慕。ひ。来。て。姫。と。争。時。万。平。忍。び。来。り。彼。是。争。万。平。後。小。太。郎。が。為。小。
殺。す。後。ぬ。花。見。は。ま。す。く。妬。く。恋。死。せ。り。其。後。小。栗。東。國。に。下。り。と。箱。根。ま。り。来。じ。に。
花。見。が。怨。靈。の。為。小。熱。湯。の。裡。に。落。り。来。馬。鬼。駟。を。殺。し。其。身。も。湯。傷。し。支。體。を。傷。し。ま。り。死。
記。せ。り。是。渾。勸。懲。と。ま。や。す。物。悟。り。り。

天花散人嵐堂

壹卷 第十八編

鬼に祟れく助重悪瘡を瘳せ
警小逐れく照姫股肱を失ふ

同上 第十九編

千里小車と牽て仏助を祈る
一朝病愈く神徳を仰ぐ

貳卷 第二十編

山鬼の魔術女児を騙る
老僧の念珠怪獸と走る

同上 第二十一編

九傑遠慮良将と助く
三囊奇計妖擧と伏る

三卷 第二十二編

宿と破寺と投して山賊と殺せ
途と草履と索て兩婦と入る

同上 第二十三編

壯夫郊示小草賊を討
孝婦白屋小美男と會

四卷 第二十四編

勇威龍と走して亡鏡と復せ
仁惠士と憐く旧室と入る

同上 第二十五編

弱士發連して東国小赴く
痴老慙愧して仏門小入る

五卷 第二十六編

怨家と討つて孝我を表せ
佛堂と再建して因縁全し

通計九回

小栗外傳三編目次

寒燈夜話 小栗外傳卷之十一

東都

絳山駝編

第十八編

鬼に祟るて助重悪瘡を瘳せ
雙玉逐て照姫股肱を失ふ

程より彼二人の間の近き程を仰ぎ着々々糸貫川に流るるは妻の
照天と所業の小女をあれ愕然とて驚るるに照天も小女も相抱ひるを
ことなればまゝと奈何とむる果敢なり一盞茶付互に言語を顔合せ
居りしが漸あつて小栗助平云出たはあつた不意妻も小女も今日只今こ
くまへと云ひまや。さうく何等の故より。只二人あつたまひ。我は這般
這般のふりより不図形と過失せりと昨夜妖怪申達して今朝栞山小
出合く温泉の池中へ鬼押を茶入れ熱湯のさあ馬を失ひその牙を

爛腸く進退心のまうなげたるゆゑ至るまで詳し物語は照天の姫も
 小女も敬勇に嘆くといふと助重が命を懸けた心をとりてまゝ助保に
 さしてやう。教は別して后身と謹む音伝を俟て刃をひけりしゆ万長女見か
 死を嘆くのみならず我に復仇とおひひ遂に在家を窺ひ知り人数を伴ひ襲
 撃し折平小女東國より帰り居りて小女小左郎の二人力をこめて
 防ぐといふも寡の衆に敵對せし死力をこめて切ぬけて辛く腹をこ
 其所の終ふ小左郎いふまじりやを去向なきに故なきに競かたお彼又
 搜索人眼なく公女もあつて糸を引をせられなき忍ぶ方もなく再び万長
 よ出合のいりたる憂は遭人も知れ移りて殿の跡を慕ひ東國より
 見参して后鬼も屏もせんぞるゆゑ俄に思ひまきとぐりけり昨日
 三島の驛路まで夜沢寺なる控行上人の行遭をもじりて上人の宣を
 よび
 昨夜祝音の報告あり小栗助重万長が女見の死心無量のゆゑ箱根山ゆく
 悩まされ不思議の事夫と稟へ明日此地方を照天姫とては彼彼を教て
 助重が救をせよとありしほど今朝より此所におきておと夜沢寺より速く小
 箱根山に往く救ひまゝと上人の教をよめて取りのりぬと此山におきて
 といひし教に差をて殿に見参せしるゆゑと語りて小栗助重と
 上人の教今よとて空しくなむと感してさてやとてやう花見のさるれば我どの
 怨みておんこゝろ怨むは此の上人の宣しるまゝとてやとてやうとてやう
 奴もゆゑ事の不審なれば上人に向ひておれが肌の守るる祝音の霊鏡の
 寛鬼威徳を怖して近寄らば又示すといふ助重毒湯を浸りしとて
 悉く悪瘡となり昔の容貌あらざれば爾れ熊野本宮なる温泉を湯治
 せし速く平愈して故に復たせしとてあれ湯毒の所なれば名譽のせし湯

昨夜祝音の報告あり小栗助重万長が女見の死心無量のゆゑ箱根山ゆく
 悩まされ不思議の事夫と稟へ明日此地方を照天姫とては彼彼を教て
 助重が救をせよとありしほど今朝より此所におきておと夜沢寺より速く小
 箱根山に往く救ひまゝと上人の教をよめて取りのりぬと此山におきて
 といひし教に差をて殿に見参せしるゆゑと語りて小栗助重と
 上人の教今よとて空しくなむと感してさてやとてやう花見のさるれば我どの
 怨みておんこゝろ怨むは此の上人の宣しるまゝとてやとてやうとてやう
 奴もゆゑ事の不審なれば上人に向ひておれが肌の守るる祝音の霊鏡の
 寛鬼威徳を怖して近寄らば又示すといふ助重毒湯を浸りしとて
 悉く悪瘡となり昔の容貌あらざれば爾れ熊野本宮なる温泉を湯治
 せし速く平愈して故に復たせしとてあれ湯毒の所なれば名譽のせし湯

鄙からんがさうぐん醫師が病を治しても息が絶たぬ照天姫を秘裡に
 祝音の山告り申す故さうぐんとははら想ひながら重病に悩める
 夫が凍死してせがふと痛まじう病をまらけ仲人あつちと翌夜合はりも
 なく祝音に祈誓て病のあつちん半死念がたれ斯うぐん時一色詮秀
 這回下総國をて下領恩賜ありく先願國をて去地の光景地理
 の要害とんたもと鎌倉の人のあつち下總お赴くとてあつち俄に大家と
 かりけるやど申従者不足のりしう密に横山を頼とてその法益者
 を雇ひて従者の教と満より横山安秀豫て詮秀が宿へがその夜も
 従者の中にかりわはしが今日此地方とては午の貝とてはなまら飯
 せんとて小栗が宿に旅店ともあつち詮秀主従立入るが鎌倉殿の幕臣
 かんべ家とてあつちとてあつち此路の保ふ人と奔走して疑行り

横山安秀此村断りのぼると庭よりて前載とてはる人行も離さるに
 真ふ人の怪める声のあつちが不審に小栗垣に伸ては祝く唐田村
 照天の家の水を汲んとて障子に風を立出る中聞き横山安秀と面合
 愕然とて安秀豫て搜索る所照天姫を目前にありしてあつちあつち
 兎角の事を顔とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 今控へ往て世に去りし汝が両親の光の夫婦に代て庭訓せらるる
 よと牽まる照天姫の此年以せ念と想ひ父の仇も達する体さう斯う
 手ひのあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 ね指捉へ腕をうし押ひ声を扇きあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 ありあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 るあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

随ひ下僕の道助も中と師の思せて生連るが主の横死をようとせんと
 生存命に取敢らして身を故郷に忍びが奴家も家の断絶に便せんと
 後悔し父の横死の光景を奴家も告んとおのひ多行是は三年福徳
 忠義の信届かぬやおんが為にお捉へられ彼鬼研お食手せんと繋ぐれ居り
 折うらに夫の小栗も還命名をおの細中も父の横死をばいおきその身は
 秋の草はあはれお白露と流ともには流へくともわく秋はれは道助が
 流語もどめて能く知る叔父君父の仇を免さばし怒みの又受とせんと
 おる短刀突くれば裁きせそとをわかしをやも又おられた故ら膝下も
 おえ嘲笑ひ悪く想ど今日までおんを改め我子の射婦もせま
 やくおひも我をりて仇と組ぶ生おれ死く其原は行かふ今
 りつとて父おひと母と母踏えぬが云は差ひさく鳥光とせぬ家もお

かけ相撲川も殺しり。その何故といふなれば正に應永七年の三春中旬の
 虎の比名武が園の先えんと小栗親子もかゝり射池の鴨鶴と某と助重
 として射より射の運れ挫くそ不えとよりしと管光の我と甲斐なれりのこと
 えをこゝめはくろくふまご類髪の助重が又なれ人と笑ふそとと終ふ
 女塔の云約束親を疎く一人を睦む我も恥く世に嘲哂をさし
 くれのうまを念ふあはれや斯く恨ものあねをこそ相撲川も欺き
 連れ彼水底に沈まして日比のや念ひ暗けり其後名武の正領を棄
 我りのよせんと謀しは汝我命を睦として鎌倉殿の山おまきと豊永のし
 助重と走りぬる急とひ弁我泣きながら妨り。そののみかたもとる光は
 我殺しをりを知り。是彼のこゝめはき汝は恨も多なれば今速く斬
 害し我腹りんとお思へども一事同くきるあはれお包まごで信が仕直しり。

横山
遭ふ



照天笠
武彦
族
宿子



川栗卷之十一

命むるの助けもせし思ひおせぶ二年前汝が夫と想ひける小栗助を
 不図も我々が漂泊するやれた。天の賜物此年以悪しとぞ人なむを
 討みんむやと議りしが彼も些く武勇と知りぬるを猛攻を致さるる
 人数と拵ざるのみらるるで討漏さんともやと毒酒をりて謀りし思ふ
 壺の差ひひるよも謀りしと思ひてさし此月の元日迄とぞんえ
 ころ我營生のそのあふ部下どもと引具し箱根山より我を行
 遭旅人の誰うとんとてはくるとれ鬼押の駒ふらちふら小栗お
 はぶぶらもなし甚怪し思ふらち間近く歩さすはけまばや今世は
 亡魂のうも生しよあつても憎しとぞ助まを着きたるもなきや
 此下どもに下知をば討みんむと追欠し彼山中あつと地獄谷ふ
 遊まらるるさるのみ今うとへり小栗のこの地獄は我れ地方とぞんえ

恨をうらその為。幽魂現れ出る体よと思ひまごころ今日まごも疑ひ
 さふお晴やじ汝とまごめて助まの才のなる果の知りはくめつまご緒の
 げし緒し威しつ滄しつ同もは照天姫の仇人組あまは念ふ今
 ままの才の上を同らるるこの腹さしく怒の涙は胸奥り雪らんぬ声
 出まはより外れるをば小女の照天が最前より入るぬ不審此不彼不
 尋ねし此所へ捜し事つててあふといふあま老人の照天姫組
 ちめて雪り居るをさるるも言詰をもりておかす横山捉くごと投
 姫を助け牽起せん照天の喜びおこし上り落せし懐又お上り小はまを
 高く寒はく小女は好くもすまらぬよ今日不意横山よお舎はまは父の
 仇討しつてお女子の甲斐も力及が返り討やなりあんとぞあ処を
 助けられ再生されば仇人と討やするんぬ身よく助太刀とぞんえ横山



目がみ進み来る。小女これを見ても雀躍して喜び出す。さういふ時、
 先人の彼横山よりあり多し。主君の敵脱さすと。才猪ひさるその際、
 横山御中記事なり。小女勢ひかほると。我一人の力も敵討がじと
 思ひけん。さういふ絨あり土舎と声する中、ゆりれば横山が部下の老も
 さういふものも一色の多勢一般におしあるあぞ。小女此れをいふも
 照天姫より対ひ宝山に入らざらば妨の事ある。時至らぬとさうい
 う。此の上よさ失のふ悔と詮をいふ。一まん此を落しぬ。
 某殿踏さずまり。勢討敵を防ぐ小女彼人とはひく。何方も脱れ
 ぬ人ともさうくと。劫りれば照天姫も大勢よまを知られてかみくと返
 討せたりぬ。よしそれとも父の為此才さういふ厭も縁と大星の
 める夫の身お及んことを危ういふ。小女が流し随ひつ。奥の方へも走入り。
 程もあつたせと多勢の人敷地へ走りぬれば安秀小女指さし彼を
 名武が家子もや小女といふのぞし。さういふ一年も我討をいふ。はる
 姫女が方人を尾を移すも。それなせる曲者あり。あれ討えと言語の
 下心よりと一般に得物とさういふ振と。脱とはじとと取囲り小女は
 一生懸命の腰刀と抜放ち。さういふ挿罵多し。横山安秀恨めさすけ。
 汝昔限るた悪行る世。故よりて鎌倉殿の心秘氣受不願も家も
 失ひく。さういふ牙を我ら君縁者の好牙は不便をかけ。右帳のあふ
 鴻恩と亡却あして去年相摸川で人たれど失ひやせ。不義非道
 とお知。ほしてありはるが。天おはし人をりて云ふ。むとわたりなり。さういふ
 後、姫君の知りしる東の方より捨たき。雙言おと縁と。姫の流すお
 妻のの流すおと重りて今日の今まで徒ら小年月さういふひ。小日頃の

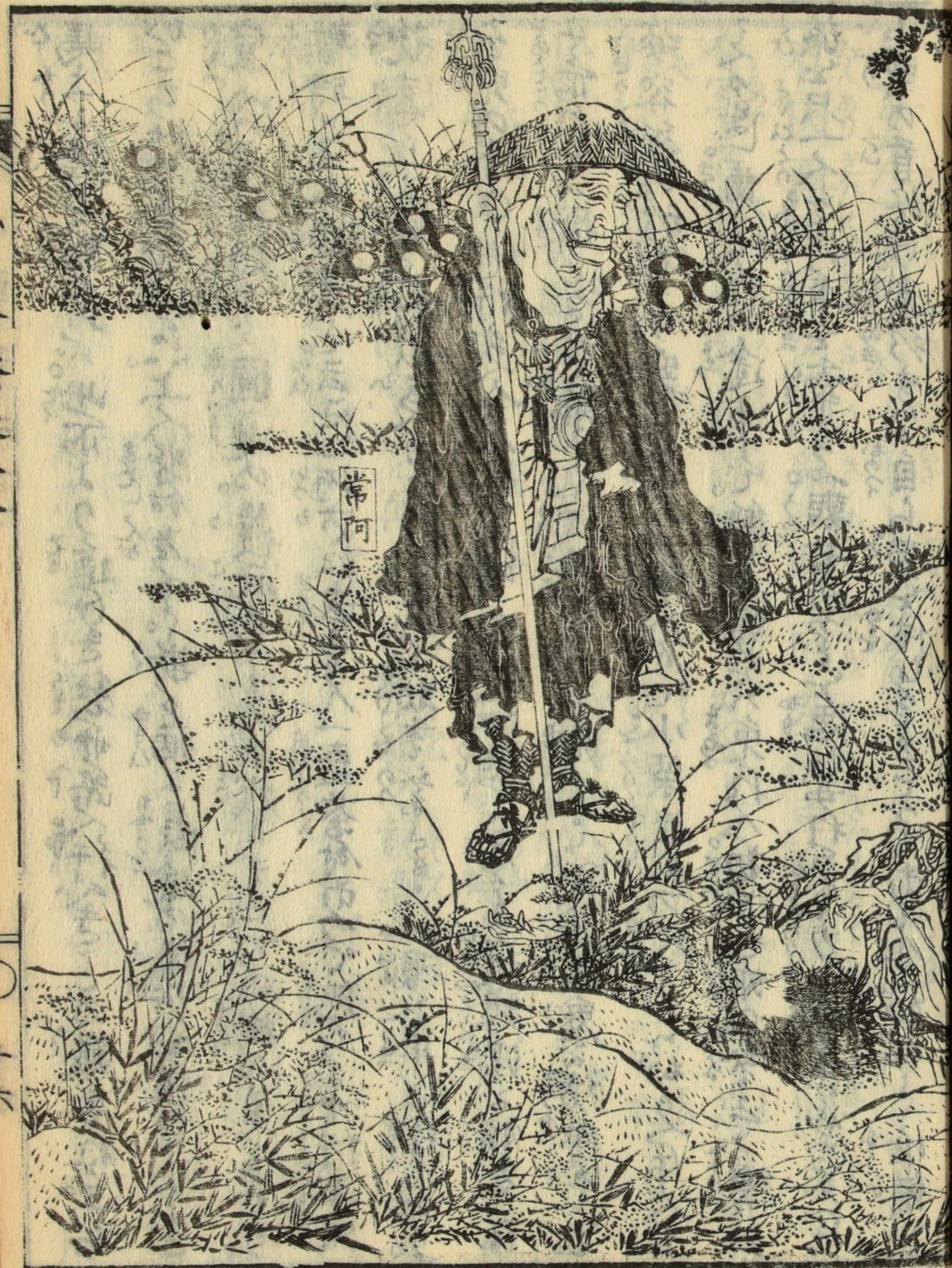
目がみ進み来る。小女これを見ても雀躍して喜び出す。さういふ時、
 先人の彼横山よりあり多し。主君の敵脱さすと。才猪ひさるその際、
 横山御中記事なり。小女勢ひかほると。我一人の力も敵討がじと
 思ひけん。さういふ絨あり土舎と声する中、ゆりれば横山が部下の老も
 さういふものも一色の多勢一般におしあるあぞ。小女此れをいふも
 照天姫より対ひ宝山に入らざらば妨の事ある。時至らぬとさうい
 う。此の上よさ失のふ悔と詮をいふ。一まん此を落しぬ。
 某殿踏さずまり。勢討敵を防ぐ小女彼人とはひく。何方も脱れ
 ぬ人ともさうくと。劫りれば照天姫も大勢よまを知られてかみくと返
 討せたりぬ。よしそれとも父の為此才さういふ厭も縁と大星の
 める夫の身お及んことを危ういふ。小女が流し随ひつ。奥の方へも走入り。
 程もあつたせと多勢の人敷地へ走りぬれば安秀小女指さし彼を
 名武が家子もや小女といふのぞし。さういふ一年も我討をいふ。はる
 姫女が方人を尾を移すも。それなせる曲者あり。あれ討えと言語の
 下心よりと一般に得物とさういふ振と。脱とはじとと取囲り小女は
 一生懸命の腰刀と抜放ち。さういふ挿罵多し。横山安秀恨めさすけ。
 汝昔限るた悪行る世。故よりて鎌倉殿の心秘氣受不願も家も
 失ひく。さういふ牙を我ら君縁者の好牙は不便をかけ。右帳のあふ
 鴻恩と亡却あして去年相摸川で人たれど失ひやせ。不義非道
 とお知。ほしてありはるが。天おはし人をりて云ふ。むとわたりなり。さういふ
 後、姫君の知りしる東の方より捨たき。雙言おと縁と。姫の流すお
 妻のの流すおと重りて今日の今まで徒ら小年月さういふひ。小日頃の

孝公白王天の憐み多しと不圖も今日沙弥出金ね斯むる天の助ありとの
 加勢のれを脱ぐとて脱ぐとてやのる先非を悔むとて此討刀を受
 よとて斬りかき部下をも隔りまゝに殺したる事小女は武勇あり
 且も忠義身を捨てて必死にまゝに働け目くららに五六人枕と並ぶ
 討まらり此光景も人々恐怖をみと近き所ぞ小女はかくとて
 負しう少裡お相おやうめまを敵の横山に益の人と殺さんなり彼を下
 太刀恨えんと四方を望ま向ひる庭堂の掃ひえりある喜むしや
 一敬よ走り寄んとする少女ささぐまを討せんとて部下もお隔力と
 してしてまゝなり小女焦燥退ひちり緑の辺お身りあり主母の仇は
 横山よ今こそ思ひ知とあれと太刀よりよく切んとしとも危うき事
 かゝ障子の裡より突然と一条の髪おすまり小女胸おきとま

急所の痛もよはしりの小女呼とのつけお倒まらり嗚呼憐れ忠は此
 大箭のあゝも此よ今を隨せし豈悼ま死るの非ぞやぞ障子と
 さと開き一色詮秀ゆくと弓箭たをさみゆるぎ出されぬ下郎の義勢
 ぞて非業の死に做愚さまといと誇らまららるるが安秀低政平は
 相公の一箭よあゝびの小臣も命危りに仁惠を無さまとての悉くを
 恩を謝されが最前よりの光景を障子の行めて粗げぬ小女の既も射
 たり照天を早く絆とり小栗が生死を掬問われと云安秀実爾のまゝ
 走りのまじいぞ追著て生捕んと部下どもを引作して照天を跡を退く
 こも照天姫の小女が跡まらり夫助を助けて馬を牽り身自ら
 馬を牽下総の方お走りし名おしおひは武義社のゆけども秋乃
 果ぞあらと古人も限りなくを死を鏡は恥とる曠おまで人家とて

さういふやうに旅行の人も少なければいゝ猛き丈夫もいゝ細く惱はなほ照天姫の
 我まの重き酒は惱めるを優恤つゝも辛くして此心まで脱れずうらも
 跡は残せし小女ごの多かき兔や角と思ふも憂小行前の道は定
 り小舟は只公をの苦しめぬそれ入のり小助をいといふ病は
 中みさういふいふをのりて遙かた道を馬上ゆく急ぎしやいふ今や
 此心に至つて身も勞はぬ地死ねるくなくまに馬上は堪へず道業の
 上はがごとくあふり。照天の慌忙因章つ助け抱ひし懐中の薬を合は
 んをがごとく四方を顧れども逝水の外は絶えりいふ。この奈何せん
 嘆つゝ身の幸なきをうらみかこら。いれ思ふや夫は今かく病はすは杖
 とも頼むし老儘を我く夫婦を落さんと殿小孫のて大勢を只一人して防
 ぐられ。死生のいとも斗はれぬ今日いふる悪日ゆて知る憂目を重くしと

流涙して嘆まじし。いとも憐みの光景なり。かゝる嘆のその亦く遠の殿より
 大勢の籠ひしものごとわれ。かく侍の人ごと顧望は方見え
 横山安秀大執力の部下ともい俱と籠ひしめる光景はゆとも弁へきこと
 なく涙をぐりお愕然と前後不せんし。かゝる心をとり。危急は迫り
 唯くして。斯く居らん。云甲斐は昔在五中。女と將く此野辺は逃げ
 申吟く。耳し。小女がて。追人の籠ひし。て搜索されども草茂く。索うは
 此野辺を焼んと。いともい。その女。武彦野をけり。かまき。と。若神のは。いとも
 このまの我も。このまの。と。流る。か。あ。て。男。と。終。お。た。り。たり。か。る。例。あ。る
 ならぬ。それ。い。ら。き。う。は。姫。と。い。た。れ。た。敵。を。籠。り。九。死。の。ら。ち。一。生。を。お。り
 こと難き。火。害。の。脱。し。ぬ。る。も。あ。り。ひ。け。肌。れ。守。の。観。音。小。危。難。を。助。け
 後。れ。と。丹。絨。こ。し。袴。の。る。當。附。一。人。の。老。傍。が。鉦。う。ら。い。し。出。す。り。追。入。の



常阿



武藏野の
良人の
奇癖の
嘆と
天照

助重

照天

馬よほ馬を悩めぬ。世より遠き能世路へ行べきことの難きならん。かゝらばいさゝか上り参上。斯く病は長途の旅行。おぼろふか。と宣ふ。道は好む。圓通の覆庇ある人。お我ま。二の術のまはなり。暫時こゝ小栗多入。云はし。何方に去らん。一盞茶付あつて。忍らば。旅行車外。扱す。天幕。對ひ。入り。これ。助を。お。ひ。形。車。の。窓。を。り。乞兒のま。して。行。今。小栗。と。の。容。貌。を。熟。く。見。る。瘦。瘠。湯。の。烟。を。ほ。く。や。瘡。を。り。て。醜。く。彼。地。獄。の。字。繪。を。見。る。人。は。餓。鬼。の。傍。を。り。姿。容。貌。の。妙。を。り。愛。り。果。れ。維。り。て。小栗。主。母。の。人。と。り。人。を。さ。る。は。雨。を。り。途。中。で。雙。の。害。を。免。れ。ん。叔。母。と。婚。の。女。と。遠。く。旅。を。只。一。人。の。行。車。を。牽。き。多。の。艱。苦。の。ち。と。思。ひ。か。れ。ん。力。を。尽。し。て。小栗。の。首。に。け。牽。引。す。自。ら。勞。を。休。む。よ。と。も。あ。ん。か。絲。々。准。備。や。

あつりえ一箇の木札より中。小栗が首かけたりあり。照天これとら。右因再生翁名。餓鬼阿弥。一回牽。此車。供養。千僧。同。と。伏。字。を。写。り。照。天。を。乞。と。措。深。く。恩。謝。し。て。上。人。の。修。恩。の。門。を。忘。り。期。や。侍。人。あ。る。も。も。有。ら。じ。と。感。亮。の。涙。せ。き。あ。を。伏。沈。ま。て。拜。り。し。小栗。も。と。り。感。佩。の。涙。袂。を。ぬ。り。孫。次。許。回。り。首。に。け。も。恩。と。謝。し。お。の。り。上。人。又。曰。さ。む。り。篤。く。謝。し。多。し。も。お。ん。主。母。と。貧。道。と。ら。は。入。き。因。縁。わ。れ。ど。も。一。回。の。う。き。と。再。三。回。大。意。大。悲。の。観。音。の。我。お。の。こ。仏。勅。あ。り。て。故。个。多。く。佛。恩。を。莫。大。に。冥。助。の。恩。を。あ。ひ。る。人。兼。思。ふ。る。多。し。と。我。お。足。り。下。總。や。常。陸。の。方。へ。立。越。す。彼。亦。お。思。ふ。十。人。の。郎。を。遣。り。思。念。の。お。ん。主。母。の。光。景。より。小。か。が。死。亡。の。辨。を。り。く。次。詳。に。告。知。し。佛。の。慈。お。入。赴。し。病。平。愈。の。時。を。待。宿。志。を。遂。さ。し。と。と。袂。を。ち。り。上。人。と。下。総。

小栗の首にけ。牽引する。自ら。勞を休む。よと。も。あ。ん。か。絲。々。准。備。や。

まじくおのむきちり。

第十九編

千里の車と牽けて佛助を祈る
一朝の病愈く神徳を仰ぐ

且説小栗助平は老阿上人の教をばりし熊野の行乞をなすはる東海道
の憚りとも及ぶれば木下路にこそ登りて助重を六車とて照天姫の
形容が如く百人の百家衣をまとひ破れし笠も面衣蔽陰も全く乞丐の
いでしなりし行車牽けり今日もひら旅衣木下路をさして行室の
心の裡こそ憐れなれ過世いする作業めて幾許の夏衣之芳村の里に旅衣
道楽をふみ久しと板橋をうち渡りけり行乞も生身人の助重とてんくと
不審とて赤首をかけるおれを洗させて行乞上人の助けも久しは餓鬼小
こもさそ因縁のありけりぬいりや車牽けりて功徳も海き千俵の目郎

あつと人と旅人の車ひ牽けり名やいふ木曾れ岨道易ことある一免は路
に入りふり此國の赤坂無井関系を万長が家より近たればは思はれん
方入きふ公跡踏むりいづも三惠寺辺に止りて先景をうかひたり
然るも此國ありぬ行乞上人近に一人の餓鬼を分けぬんと行車お
らち系とて熊野の温泉はせらんとて此彈路をさすなり此車と牽け
りぬ一回牽が千俵を供養する事お均しきと書付く事いぬはは
牽けりことやむおれと人々車ひ行乞を万長が許の娼婦を街の
嘆をうちやて我們的罪障いふおとるも助重は彼餓鬼病の小車
を牽けり少しき功徳もなりやとらんと語りし主の長は野村の眼を
こひく打連を三惠寺辺にお出逢ふ事あるお陰に餓鬼病の車と休むるを
えり我を牽めと寄すなりはななく車と牽行の暇を尋ね惑へとも止りぬ

術なうて女をかくて車中添ひ行がどなく青墓の驛もなれば今こそや
 万長よん知多 くれ月の大のちや及んると只顧圓通大菩薩のおん名を
 唱へて思ふなく此西をささし多かれと公は初念はしけり公の眞助や加りえ
 此苗村ふ糸都より鏡倉屋への使長が許し宿りめく俄のちあて
 慌忙き車を牽りし唱妓も足らぬ別をまじげ潭長許し還
 久照天の虎口を免れてもやも此西が腹まるとしけり汗の垂井さへ
 知れ公の罪を承越は行くや我夫の病をいつら醒井とやうの娘は死
 祥なれややがて平愈めらるる歌の首とる井中勇にきえは宮
 のかこもかた後の赤容貌いささまりてりて往ん鏡山の月影を湖あふ
 映し皇りかた父や舅の忠臣の信を君お父へあけ後者亡びて明き
 法代よあまこの石山寺大慈大悲の心秘さひ空しくも助きの枯木

似る才の病愈さし多し花咲る春に逢ひ多し伏拜する跡もな
 行け糸都もやとる日八早舟の伏見の里旅行人の足も流の煙や
 ひとるが秋の夜明く朝日影ささも各もれ難波津のじしなるとの橋
 眺む四天王寺を後首つ牽りて小車のきくらと岩の和田の糸八十を
 かけて漕ぎと海士の小舟の楫を断ちひおはじ身の上れよりをささる
 旅枕古歌の公のあこれさ思ひ和泉の信田なる本林の楠千枝よつき
 物思ふが喜れ人も我とめらきなら憂世とらみ葛の里とらむ此西へ
 紀の國や和舟の浦波うちあせて芦間の雀も夫ぬづれとらむそのま
 似はれともころ夫をる才の病かともあまる涙こそ潮にけり公の石の
 乾く隙き入るる旅の日数をねらふ御くこは行車牽はくも怒舟の藤舟
 思ふも抑態野権現ももたら伊弉諾伊弉丹のまらて神武帝れ

く屋もせせ山川江海を越えり夫の
み小共身もさる。歎ひ少るる真所を香
かとも控況の汝が赤心そく人感意
あて助をら病苦救ひほせん為
我とて神意を生けしたまふん助を
あま足思孝の志を篤ん老まれば
を積善の餘慶あて沈病癒ふ

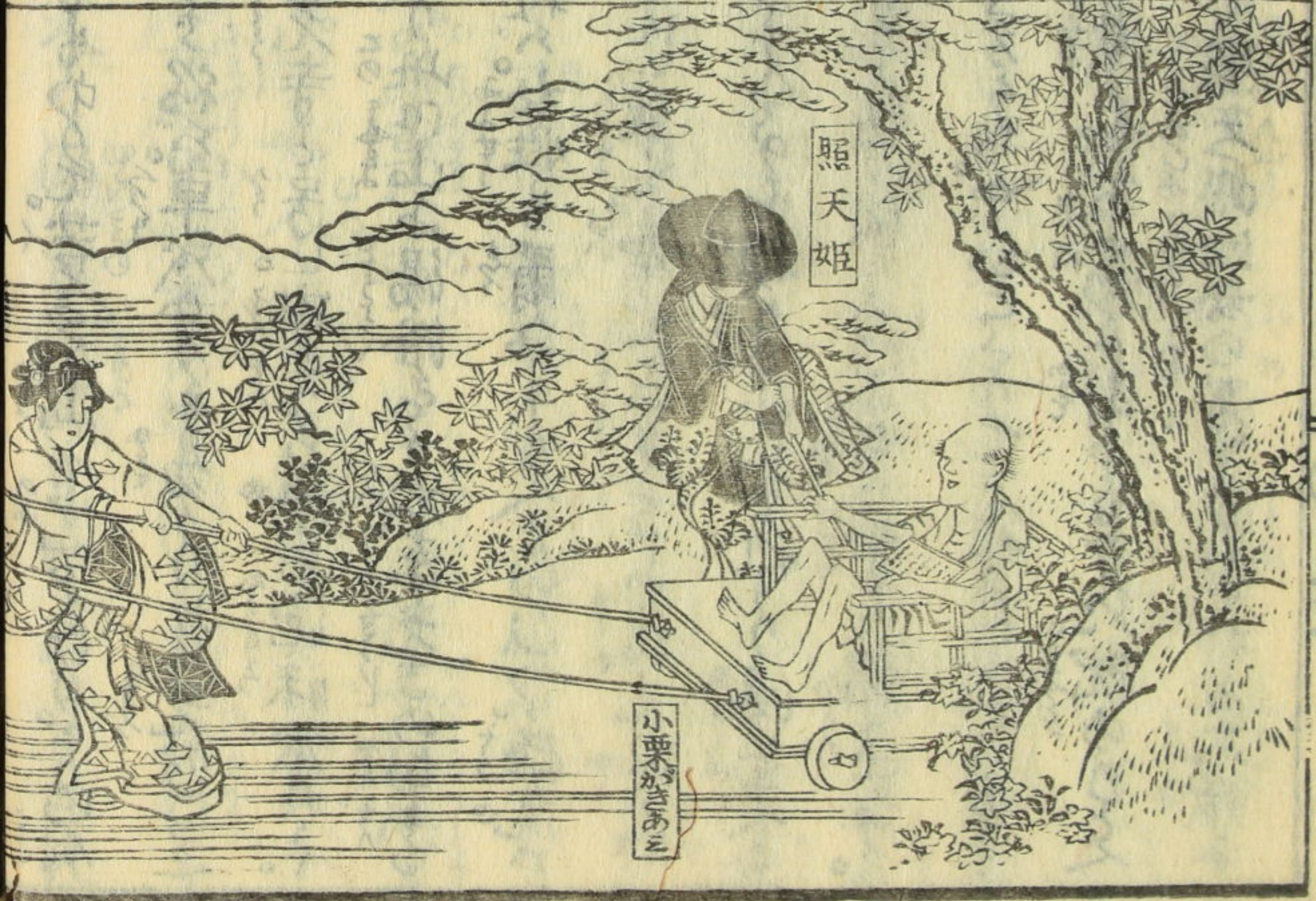
快然せん。浴室中なるを
下へ行く

小栗餓鬼病と成り
熊野奉宮の湯湯治
せんとして昔墓の驛路を過

万長が家の娼妓木後世を助
らと小栗を介し行車を
牽の圖

下のつぎ

時刻を移さる障りもあへん前にお
傍を助をら車を助け牽らしゆ足
控況の方便そと宜ふ声のみ耳をこふ
響の聲の招風も夏涼のそよ風吹
醒しありし病の疾あへんまの例ふ
偶ゆらり照天の睡醒く后神勅の程
の有ごとく信心膽も強はる感意の
涙巾袂を流し此上のゆと疑ひゆる



惑りん。いざと云はく。小車の総と尻手に甲斐もまた女もくも念力の強き
 ろく。丈夫も及む。巖や松が根も厭て。車と牽るれど。苦うく。苦うく。攀
 ねり。此地方の則足温泉の湧き。金佛の薬師あり。その像。十二の穴
 あり。其穴より温泉湧き。淋病を治する。万中一つも差ひ。これ。此神
 方便の至妙なり。照天の夫。丸抱き。サ。師の。軀より。芳。温泉。と。灌。き
 か。くれ。不思議。なる。用。牙。爛。也。し。処。瘡。と。お。り。膿。汁。流。て。臭。氣。を。し。り。お。
 其。瘡。悉。く。癒。を。結。び。く。臭。氣。失。ち。た。れ。ば。姫。の。靈。験。の。新。か。ら。を。感。じ。
 指。次。の。神。恩。が。多。し。り。お。附。し。ま。く。せ。尚。神。力。權。護。を。加。へ。り。と。祈。念。し。く。
 急。慢。なく。日。小。三。回。法。浴。を。と。ふ。神。明。仏。陀。の。奇。特。空。し。か。ら。後。日。も
 預。さ。る。ふ。病。漸。く。と。愈。く。十。日。少。満。ど。と。さ。し。も。醜。り。し。瘡。愈。て。骨。肉
 昔。上。後。原。の。小。栗。助。重。の。仕。さ。る。身。と。な。り。け。ら。不。思。議。と。い。ふ。も。餘。あり。

助重。と。さ。ら。も。し。つ。と。照。天。の。在。び。た。さ。な。ら。ば。足。説。世。音。の。冥。助。と。
 慈。野。村。現。の。神。力。と。且。と。常。阿。上。人。の。道。徳。お。よ。ほ。の。こと。夫。奴。然。と。も。お
 慈。世。三。山。へ。噴。れ。し。ま。と。照。天。の。守。お。さ。る。れ。説。世。音。と。拜。し。ま。う。り。さ。る。と。ま。ま。と
 東。國。の。方。を。伏。拜。み。常。阿。上。人。の。恩。を。謝。し。ぬ。後。助。重。照。天。お。し。り。ひ。つ。ま。う。り。
 仏。神。の。助。よ。う。て。斯。平。愈。を。做。と。り。く。ど。お。ん。身。が。信。の。女。保。せ。り。山。火。被。え
 川。を。渡。り。て。い。と。遠。れ。武。彦。よ。り。し。て。と。る。ぐ。と。紀。伊。國。なる。果。ふ。恙。なく。も
 到。る。こ。と。を。ほ。ろ。り。此。恩。い。つ。る。忘。は。き。と。懇。心。み。れ。を。の。が。ね。ば。姫。を。返。す。と。
 り。お。思。ひ。も。か。け。ぬ。ぬ。る。の。と。夫。人。の。妻。と。して。夫。天。と。し。仕。さ。る。と。返。す。と。
 か。ら。ぬ。こ。と。を。し。さ。れ。ば。夫。の。為。と。し。あ。ら。ば。身。と。肉。將。者。に。か。ま。さ。る。と。も。い。う。ぞ。う
 厭。ひ。し。ま。さ。ら。長。途。の。旅。を。預。ると。い。い。と。仏。神。王。法。の。三。恩。と。殿。の。洪。福。を。て。
 幸。ひ。小。恙。なく。死。す。と。ほ。ろ。れ。い。う。と。奴。家。が。力。も。及。び。ん。や。と。お。の。が。艱。苦。を。せ。し

こと此も誇りど謙り。いとたゞ事り申入るれ助を妻のかしこ成と今ふ
 ことぬ事りながら。千幸万苦又労とせぬ志気又精とせぬ情あも懐恤
 感謝の涙も咽びるり。夫婦の間に穢あはれ。いともしみどき好述なを。
 斯て小栗助を病やうと愈へる。今日もや一日も早く宿志成と事ん
 こととあり人と東國申居る所儀亦且と小を所が音同もなせぬ敵の中へ
 夫婦のみ行へと思ふなうはせぬ事なれが今驚く人の動静と行ん
 とて。熊野山の藤母かごころの家の言ひ夫婦とれ申居るぬ。そのうちも
 日毎権現は来ふ。神竹の加護を祈りて。
 ○前申熊野山の事記とせられ其のの長をれが本文又讀の妨
 なまふ載と小栗靈湯ゆて入主快とせられ一件既は満備とまが今
 幼童の爲め茲は熊野権現の畧縁記を述く神明の徳を知じむ。

こと尤のおぼし。

- 熊野権現 牟婁郡社領千石 △祭神三座 △伊弉並尊 △事解
- 男神 △速玉男神 神武天皇五十八年出現し。伊弉冊尊の
- 岳跡なりと云云本宮の出づ神天皇の十六年小始て建之たり。小
- 新宮の景行天皇五十九年建之あり。耶智と龜山院文應年中小
- 建之ありふとて是を熊野三所権現と崇まらるり △熊野権現
- 證滅殿 本地阿弥陀 △西所権現 本地菩薩観音 本地新宮と云
- △若一王子 本地施無畏大士 △飛瀧権現 本地千手観音

○右四件ハ習合の説なり。
 凡熊野権現の事ハ旧事記古事記日本記纂疏神名帳その他
 雜書ハ記とこと爲區くふと一定ハ諸説長文也。容易

かゝる福がらあがおあ奉おと退あひおく畏うこも其ま要あ次き老らのお影かげ
 仰あげらいよく高たく永と世と神か徳とくを失しるるを速すみく而の已ひ
 ○古いにしへ天子てんし熊くま野の山の御み幸ゆきありし平へい城じやう天てん皇かうと始はじめとと光ひかり山の院いん一いち度ど
 白しろ川がわ院いん五ご度ど堀ほり河がわ院いん一いち度ど鳥とり羽の院いん八はち度ど後のち白しろ川がわ院いん三さん度ど代より乃なり
 天てん皇かうとと斯かき信しんははまませせバ神かみ徳とくのあ新あらたまる措さて知しります

小栗外傳卷之十一畢

